

20151114_農業情報総合研究所／農業ビジネス研究会_議事録

日時：2015年11月14日（土）15:00－17:00

場所：東京・池袋「バー クオーレ」

テーマ：コミュニティの力で農場を作り、運営していく農業！

発表者：片柳義春さん（なないろ畑代表）

参加者：16人（発表者を含まない）

（NPO 法人理事長、会社経営、自営業、会社員、FP、大学生、
社会保険労務士、行政書士、司法書士など）

目次：

1. なないろ畑とCSAの概要
2. なないろ畑の誕生と軌跡
3. CSAのメリット
4. なないろ畑の展開と課題

発表：

1. なないろ畑とCSAの概要

農地は大和市・座間市・綾瀬市の住宅街の中にあります。4ヘクタール強です。とはいえ、小さい農地に分散しています。現在、出来るだけ集約するようにしています。このほか、長野県辰野町（中山間地域）にも農地を取得しました。

現在、会員に向けて85セットを出荷しています。目標は100セットです。セットは月額11000円または8000円となっています。元々はもう少し安かったのですが、放射能対策費が上乘せられています。福島第一原発事故の直後は出荷したくありませんでしたが、会員から「では、何を食べれば良いのだ」との要望をいただいたのが沿革です。売上は年間1150万円です。目標は1500万円です。

社員は2名、パートは4名（農作業1名、事務1名、配達2名）、ボランティアは約30名です。寄付も多いです。お金だけでなく、ユンボなどの中古機械も寄付していただいています。セットは基本的には農場まで取りに来てもらっています。農場まで来ることのできない近隣の方のために、リタイアしたおじさん（パート）に配達をしてもらっています。会員は近隣の方ばかりです。

Community Supported Agriculture（CSA）の概念としては、①ボックススキーム型CSAと②トゥルーCSAがあります。①は有機野菜の産直・宅配の仕組みに過ぎません。②は消費者が参加し、消費者が作るものです。農作業という労力や資金を提供します。さらに、農を媒介としてコミュニティを作るものです。農林水産省の青年就農給付金により有機農業を行いたい若者が増えてきています。若者を育てる仕組みにもなればと考えています。

会費収入約1000万円のうち、600万円が人件費、400万円が人件費以外の経費となっています。その他、直売所の収入があり、これは設備投資やボーナスに充てています。しかし、お金があれば回るということではありません。会員の心をいかに変えるかです。経済学ではなく、社会心理学・教育心理学が必要になります。

なないろ畑は株式会社です。会員に株式を持ってもらっています（株主構成は農地法の規制があります）。農業をしたい人がお金を出していくべきです。また、先々、事業承継を考えています。株式を後継者に譲ることで退職金とすることもできると考えています。また、労力を出し合うことで、消費者から生産者になってもらうという仕組みとなっています。たとえば、農作業だけでなく、集出荷場の建築も会員が行っています。会員には多様な人が集まっています。

2. なないろ畑の誕生と軌跡

なないろ畑は地域通貨が出発点でした。コミュニタリアリズム（共同体主義）が基になっています。公害や競争社会など20世紀の「負の遺産」に対して、東京オリンピック以前の豊かな自然を取り戻すようなエコロジー型社会を目指しています。また、一次産業の復権も目指しています。そのためにはまず、小さなモデルを提示する必要があります。大きなビジョンの可視化のためです。米国では、有機野菜は富裕層のものになっています。貧困層はファストフードしか食べることができません。日本であれば、庶民でも有機野菜を食べることができるようにすべきです。そこで、国内版のフェア・トレードの仕組みをつくるべきです。これを自分たちで行っています。農業は農家のおじいさん、おばあさん、奥さんなどの家族の無償ボランティアで支えられています。なないろ畑は出荷場にて行う収穫した野菜の手入れや出荷のために袋詰めする作業を会員のボランティアに支えられています。

地域通貨は、落ち葉かきのボランティアとつなげて、さつまいもと交換できるようにしていました。しかし、コミュニティが崩壊してしまいました。また、農地の規制も事業発展の障害となりました。そこで、宅地にて農業を始めることにしました。土壌改良を行いました。狭い土地なので、畝ごとに作物を変えました。それを見た年配の女性が、「なないろ畑だね」とおっしゃっていたのを聴き、その名前をいただきました。そのころ、飲食店に卸していたのですが、一人で収穫と出荷を行っており、手が足りなくなりました。そこで、飲食店の方々に自身で収穫してもらい、自己申告してもらいました。初めは積算方式でしたが、煩雑でした。そこで、前払いの定額方式となりました。それが口コミで広がって行きました。消費者に言わせると、収穫が楽しくてしょうがないということです。これが、アメリカのトゥルーCSAと言われるものと同一の仕組みでした。気が付いたら、CSA、しかもトゥルーCSAになっていました。

3. CSAのメリット

CSAのメリットですが、生産者側は労働力、資金（お金と物の寄付を含む）を補うということになります。販売先が安定（直売所に行っても売れ残りが生じる）し、収入が安定し、計画的な経営ができます。消費者側は、友だちを作ることができます。美味しく、安全な野菜を食べることができます。震災など非常時の備えともなります。そして、癒しを与えてくれます（農福連携への発展も企画しています）。また、一人暮らしのお年寄りのセーフティネットにもなります（高齢化の進む会員を支える仕組みになっています）。CSAの深い意味は、コミュニティこそが最大の生産物だということです。野菜だけでなく、人、社会を育てるということです。産消提携は点と点を結び「線」とするものですが、CSAは多数の点を結び「面」とするものともいえます。

4. なないろ畑の展開と課題

「進化するCSA＝なないろ畑」です。一種の文化になってきています。なないろ畑の中に、花の会、ハーブの会などサテライト・グループがどんどん増えています。会員から発案があったときは、発案者自身に立上げ、運営をしてもらっています。受動ではなく能動です。マネーが動機ではありません。経済学では見えないものがあります。さらに、長野県辰野町も拠点となります。これにより、中山間地とつながることができました。エネルギーの自給も行っています。薪やBDFなどです。地方の生産者とのつながりもできています。高知県の町の有機生姜などです。単発型CSAの展開も始めました。大豆や小麦など穀類を中心に単品目のCSA（大豆畑トラスト、小麦畑トラストなど）です。普通に生産しているのは、コストをペイできませんがCSAであれば成り立たせることができます。これら穀類は買った方が安いのですが、

それでも会員になる方がいます。

課題としてはCSAが社会に広まらないということが挙げられます。その理由としては、①概念が知られていない、②農業の置かれた厳しい現状が知られていないことです。課題解決として、CSA研を発足しました。また、「協議会」化を目指しています。ここで、若者の指導も行いたいと考えています。

可能性と展開としては、地域に自律的なコミュニティ（連帯経済）を作ることです。このためには、「社会の団粒構造化」が必要です。現在の社会は孤立する個人という単粒と、巨大組織（農協、生協、官僚組織）という土塊になっています。土塊は形がい化により腐敗します。この現状を壊す必要があります。CSAを越えて、草の根経済圏を作るべきです。そのためには、高い理念と哲学が重要です。これにより、人を集めることができます。面倒くさいと感じるよりも、美味しいものを食べることができると感じられるようにすることです。戦略は近くにいる友だちを大切にすることからです。共生的な経営を目指します。小さいパイを奪い合うのではなく、パイを大きく育てるということです。漢方薬的な経営ともいえます。直売よりも会員を増やすことで、魅力ある市場を作ります。なないろ畑のこれからの目標ですが、まずは出荷場をカフェにします。会員の滞留・交流時間を増やして、コアメンバーを増やします。ユーピック農場にて農業体験ができようにします。伊那谷の古民家にて田舎体験を行えるようにします。地元の方々は気付いていませんが、宝の山です。そして、震災など行った時の避難場所とします。

以上